



雪はどこから降ってくるの

雲をつくっている小さな氷のつぶ（氷の結晶）

上空の気温の低い所でできた雲は、小さな氷のつぶが、集まってできています。この氷のつぶは、氷の結晶になっています。

上空は気温が低いので、空気中の水蒸気が水のつぶにならないで、氷の結晶にくっついて、だんだん大きくなっていきます。これが、雪のつぶです。

氷の結晶のまま落ちる

地上付近の気温が、0 よりも低いときに、落ちてきた氷の結晶は、とちゅうでとけないで地上に降ってきます。これが雪です。

雪のつぶは、地面へ落ちてくるとちゅうでも、さらに、まわりの水蒸気をくっつけて、大きくなります。

雪が降ってくるとちゅうの、気温が高いときは、雪の表面がとけて、いくつかの雪の結晶がくっつくので、大きなぼたん雪になります。

また、気温が低いときは、小さい結晶のまま、さらさらとした粉雪になります。

雨も雪も、もとは同じ

氷の結晶が降ってくるときに、地上付近の温度が、0 よりも高いときには、雨やみぞれになります。つまり、雨も雪も、もとは同じものですが、降ってくるとちゅうの温度のちがいによります。（監修・村山 貢司）

